研究ノート

短期大学における一般教育科目としての第二外国語（フランス語）教育

—英語学習との関連において—

太　田　昂　治

はじめに

外国語教育の目標については，コミュニケーションに必要な技能の養成，外国文化の理解，国際協調精神の育成，諸外国との友好関係の発展，自国語の理解，一般教養の高揚など幅広く論じられてきた。そして，そうした多面的な目標をこれまである程度達成してきたことは確かである。FIPLV (Federation Internationale des Professeurs de Langues Vivantes: 1975) の調査によれば，最近の動向としては大多数の国がその国における外国語教育の主な目標を「コミュニケーションに必要な技能の養成」に置こうとしている。外国語教育の最終目標はやはり「言語教育の究極目標は，学習者が正確かつ流暢に，そして主体的にその言語を使えるようにすることである。」(W. F. Mackey) ということになるのではないだろうか。

しかし，日本語のように孤立した言語を母国語としている我々にとってこの目標を達成するには相当の時間数を要することは，現在「英語」の学習にあてられている時間数を考えるまでもないことである。しかるに，一般教育科目としての第二外国語にあてられている時間数は極めて短い。特に，短期大学においては1年次だけで週2時間程度で終るところが多い。このような状況のもとで，その教育目標をどのように考え，どのように授業を進めればよいのであろうか。

Ⅰ．目標について

外国語の習得に必要な時間数は，母国語とその対象言語との類似性や学習方法や学習に用いる時間の密度や社会環境などによって異なるので一概に推定することは困難であるが，かなりの時間を要することは確かである。殊に日本語を母国語としている我々にとってはなおさらである。このために，我が国における第二外国語教育について，その言語のコミュニケーションとしての運用面に期待するよりも，思考力や意志力の訓練としての効果を期待したほうがよい，という説もある。外国語学習を通して数学などの学習とはまた違った意味で人間的な思考力や意志力を訓練することは可能であろう。しかし，やはりそれは外国語学習の間接的な効果として期待できても，それ自体を直接目標とするべきものではない。では，短期大学における一般教育科目としての第二外国語（フランス語）教育に何が期待できるのであろうか。私はその目標として次の4項目を自分に与えている。

(1) 英語の知識を活用することによって，短い学習時間をできるだけ有効に用いて，コミュニケーションに必要な技能の養成を目指すこと。

(2) フランスの文化やフランス人らしさをできるだけ理解させ，良識ある人間性豊かな国際人を育てること。

(3) 第一外国語である英語の学習を深めさせる意味において，第二外国語としてのフランス語の知識を役立てること。

(4) フランス語を学ぶことによって，一層深く母国語（日本語）の特性をかえりみさせること。

以上のとうりであるが，(1)の英語の知識を役立てることについては，多くのフランス語の教科書や参考書の著者が主張しておられることで，構文，語の配列，語いなどを英語と関連づけて理解させると短時間学習の効果をあげ，フランス語の記憶を定着させるのにも役立つと考える。なお，コミュニケーションに必要な技能の養成を目標とするのは，短い時間数から判断すれば，あまりに

も遠過ぎる目標で意味をなさないとも考えられそうであるが，たとえ不可能とわかっていてもこの最終目標に焦点を定めて進むべきではないだろうか。この遠い目標に一歩でも近づく努力を第一として，他の目標にも沿う努力をすることが，第二外国語学習においても基本的態度として常に保たれていなければならないと思う。上述(3)については，「フランス語を学習している英国の生徒が，英語の文法を，いわば，フランス語の目を通して眺めるということは，確かに可能であり，かつ有用なことである。」（ハリデー他「言語理論と言語教育」大修館 p.145）このことから，日本において中学・高校と6年間英語を学んできた学生が，フランス語を学ぶことによって，フランス語の目を通して英文法を見直すことが出来るというのも同様に有用なことだと考えてよいと思う。

Ⅱ．第二外国語学習の動機と興味について

本学においては，一般教育科目としての第二外国語は1年次において独・仏いずれか選択必修になっている。本学でフランス語を選んで学習している学生に対して，最近行なったフランス語を選んだ動機と学習興味についてのアンケートの結果を示すと，次のとうりである。これは本学短大1年生の80人を対象に1980年9月，前期試験の直前に行なったものである。

第二外国語としてフランス語を選んだ動機と学習興味についてのアンケート

質問1　第二外国語としてフランス語選んをだのはなぜですか。

（%）

① フランス語が自分にとって魅力があったから……76.3

② ドイツ語よりフランス語の方が単位がとりやすいと思ったから…… 5.0

③ ただなんとなく選んだ（ドイツ語でもよかった）…… 3.7

④ 人からすすめられて選んだ…… 3.7

⑤ そ の 他……11.3

質問2　フランス語の学習に興味がありますか。

(%)

① たいへん興味がある…… 8.8

② かなり興味がある……16.2

③ 少し興味がある……61.3

④ 興味はない……13.7

質問3　フランス語の学習にあなたの英語の知識（語い・文法）が役に立っていると思いますか。

(%)

① 役に立っていると思う…… 80

② 役に立っていないと思う…… 20

質問1の⑤『その他』では，「将来ぜひフランスへ行きたいから」「以前にフランス語を習ったことがあるから」「希望している就職にフランス語をやっていると有利だと思ったから」「家にフランス語の辞書があったから」などがあった。質問1の回答のうち，フランス語の選択理由が「単位をとりやすいと思ったから」「人にすすめられて」「なんとなく」など消極的理由によるものが15%あるが，残りの85%はなんらかの意味で積極的な意志によってフランス語を選択している。質問2に関しては，フランス語を学習しはじめて4か月の段階で86.3%の者がフランス語学習に興味をもっていることを示している。質問3では，80%の者が自分のもっている英語の知識がフランス語の学習に役に立っていると感じていることを示しており，このことを質問2との関連において調べてみると，質問2で「興味がある」と答えた者のうち84.1%の者が「英語の知識がフランス語の学習に役に立っている」と考えている。それに対して「興味はない」と答えた者のうち45.5%の者が「英語の知識が役に立っていない」と思っている。即ち，英語の知識が役に立っていると思っている者の方がずっと多くフランス語の学習に興味をもっているということがわかる。

フランス語を選んだ理由には，パリをはじめとしてフランスという国がもっている魅力やフランス文学・フランス映画・ファッション・料理・シャンソン

やフランス語の美しさにひかれてなど，があると思うが，案外「国際語」としてのフランス語の地位を知らないので，動機づけや興味づけのために，次のようなことも認識させたい。①国連の公用語は，英語・フランス語・ロシア語・スペイン語・中国語・アラビア語の6言語であるが，そのうち英語とフランス語が国連の working language, つまり議事運営や案内業務などに主に使用される言語である。② UNESCO (1964) と FIPLV (1975) の調査によると，世界119か国で外国語として教えられている言語の中で，第一外国語として英語を選んでいる国が85か国，フランス語を選んでいる国が21か国，ロシア語が6か国，イタリア語が3か国，スペイン語が2か国であり，フランス語は英語と比べると少ないが，英語とフランス語を合計すると全体の84%を占めている。

H.E.Palmer は，言語学習に興味の持続が必要であることを力説し，その要素として次の6項目をあげている。（1）the elimination of bewilderment（困惑要素の排除）（2）the sense of progress achieved（進歩感・成就感）（3）competition（競争意識）（4）game-like exercise（ゲーム的練習問題）（5）the right relation between teacher and student（師弟間の正しい関係）（6）variety（多様性），以上の項目のどれをとっても短い第二外国語学習の中で満たすことは困難である。しかし，努力目標として常に考慮しなければならないことであろうし，特に(1)困惑要素の排除，(2)進歩感・成就感，については細心の考慮をしながら授業を進めなければ，せっかくのフランス語学習がおもしろくもない単に単位を揃えるためのいやな科目として終ってしまうであろう。

Ⅲ．授業のあり方について

授業のあり方として私が考え実行していることは，出来るだけ英語の知識を利用することによって短時日で終るフランス語学習の効果を高め英語と関連づ

けてフランス語の記憶を定着させるようにすることである。しかし，音声については，英語の発音の知識はフランス語の発音にあまり役に立たないし，かえって邪魔になりさえするので，英語の発音を参考にしないようにして，日本語から出発するようすすめている。音声指導には時間がかかるので，短い年間時数のなかで音声に力を入れると遅々として進度がはかどらず苛立ちを感じることも多い。 しかし 外国語教育はなんと言っても 音声を優先しなければならない。幸い，日本人にとっては英語よりフランス語のほうが発音しやすい。

丸山圭三氏「発音に関してだけ言えば，日本人にとっては英語よりフランス語の方が発音は楽ではないかと思います。……日本語とフランス語は発音からだけ見たら近い言葉といえるでしよう。」

田島宏氏「僕も，発音に関しては，英語をできるだけ忘れて，むしろ日本語から出発してフランス語の発音をするという考え方に賛成です。」（「基礎フランス語」55年5月号）

私は，毎授業時間テープを聞かせるのを欠かさないように努めており，また教科書のテープは学生各自にもたせ，「音声」のテストを行ない，なんとか自分としては満足に近い結果を得ている。抑揚に関しては，英語との比較学習の意味で次のような点に注意したい。英語は句が長くなるにつれて以下のように語の強勢を変える。

It's an old house.

It's a nice old house.

It's a very nice old house.

一方フランス語では，強勢の位置は以下のように，一般に語，句，文の末尾にある。

Je sais.

Je le sais.

Je ne sais pas.

Je ne le sais pas bien.

Je ne le sais pas assez bien pour ça.

また英語の強勢の変化は，フランス語では通常次の例のように表現の変化となって表われる。

（英） 1. Henry (not John) gave me this book.

2. Henry gave (did not lend) me this book.

3. Henry gave me (not you) this book.

4. Henry gave me this (not that) book.

5. Henry gave me this book (not this knife).

（仏） 1. a) Ce livre m'a été donné par Henri.

b) C'est Henri qui m'a donné ce livre.

2. Ce livre, Henri me l'a donné.

3. C'est à moi que Henri a donné ce livre.

4. Henri m'a donné ce livre-ci.

5. C'est ce livre que Henri m'a donné.

語いに関しては，まずフランス語と英語は cognate（同語根語）が極めて多い。S. Resnick の "Essential French Grammar" の巻末には，2500 語の cognates があげられている。形容詞の接尾辞が -able, -ible, -al, -ant, -ent の場合や，名詞の接尾辞が -ion, -tion, -age, -ice, -ent, -ence, -ance, -acle の場合は，以下のように両語は同じ綴りであるものがほとんどである。

（英仏同綴語の例）

admirable	innocent	accident
confortable	opinion	moment
horrible	million	patience
possible	attention	silence
commercial	nation	balance
royal	courage	finance
ignorant	passage	miracle
important	justice	oracle
excellent	service	

しかし，綴りが同じであれば意味も同じであろうと学習者が軽く考えないように，次のような例も必ず示す必要がある。 lecture は英仏同綴りであるが，英語は「講義」，仏語は「読むこと」と意味は異なり，commode は英語では「整理だんす」を意味する名詞であるが，フランス語は同じ意味の名詞の他によく使われる「便利な」を意味する形容詞がある。 またフランス語の sensible は英語の sensible ではなく sensitive である。また，chance, change, confection, face, figure, grave, habit, location などのように綴りは同じであっても，あるいは似ていても (actual:actuel, apology:apologie など)，意味する範囲が異なるものは数多くある。また次のような語は，綴りは似ていても意味は異なるので注意を要する。

(英　語)		(フランス語)	
attend	～に出席する	attendre	待つ
appointment	約束	appointements	給料
library	図書館	libraire	本屋
physician	内科医	physicien	物理学者
presentment	陳述，提出	présentement	現在では
supply	～を供給する	supplier	懇願する

文法に関しては，フランス語と英語は構文や語の配列がたいへん似ているので授業の進度に応じて両語を比較して説明すれば，学生はそのことに興味をもち理解もし易いと思う。例えば，次の例文などがそれである。

Subject	Verb	Direct Object	Prepositional Object
Pierre	écrit	une lettre	à son père.
Peter	is writing	a letter	to his father.

Subject	Verb	Predicate Complement
Son frère	était resté	garçon.
His brother	had remained	a bachelor.

注意しなければならないのは，両語が似ているためにかえって類推によって起こしやすい干渉を未然に防ぐ授業処置をしておかなければならないことである。英仏両語の比較では「時制」に特に注意しなければならない。例えば，フランス語の直説法現在の Il joue du piano. は英語の直説法現在の He plays the piano. と現在進行形の He is playing the piano. の両方の意味を合わせもっている。フランス語の複合過去の J'ai lu un livre. は英語の現在完了の I have read a book. と同じ伝達内容を伝えており，文構造も全く同じである。このため学生は現在完了と複合過去を同じ用法のように誤解してしまいやすいので，誤解に落ち入らないよう未然に説明しておかねばならない。つまり，フランス語の複合過去は「過去時制」であって，過去を示す副詞と共に用いることが出来ることや，「過去の行為の結果が現在に残っている」英語の現在完了の『結果』や，「～したことがある」という『経験』を表わすことも出来ること，しかし英語の He has been working. のような『継続』を表わすことは出来ない，ということなどは説明しておくべき基本的な異同点である。また次のような場合には，英語の現在完了がフランス語では直説法現在で表わされることも説明に加えたい。We have known him for years. = Nous le connaissons depuis des anées.

構文や語順が全く同じものや極めて似ているものを次のように英仏両文並列して示せば，学生の興味を増し，文構造の記憶を定着させるために効果がある。

(A) 文構造が同じで覚えやすい文例

1.

Mon	cousin	et	sa	fiancée	arrivent	à	six	heures.
my	cousin	and	his	fiancée	arrive	at	six	o'clock.

2.

La	première	leçon	est	très	importante.
The	first	lesson	is	very	important.

3.

Il	est	facile	de	faire	cela.
It	is	easy	to	do	it.

4.

Je	suis	ennuyé	de	ce	travail.
I	am	tired	of	the	work.

5.

Il	paraît	très	occupé.
He	looks	very	busy.

6.

Je	comprends	parfaitement	quand	vous	parlez	lentement.
I	understand	perfectly	when	you	speak	slowly.

7.

La	fleur	qui	est	dans	le	vase	est	très	belle.
The	flower	which	is	in	the	vase	is	very	beautiful.

8.

C'	est	le	monsieur	que	j'	ai	connu	à	Londre.
This	is	the	man	whom	I	have	known	in	London.

9.

Quand	nous	sommes arrivés	à	la	gare,	le	train
When	we	arrived	at	the	station,	the	train

était	déjà	parti.
had	already	started.

10.

Il	avait	beaucoup de livres,	beaucoup de papier,	peu de pain,
He	had	many books,	much paper,	little bread,

peu de plumes,	plus de prudence.
few pens,	more prudence.

(B) 文構造が極めて類似していて理解しやすい文例

1.

Je	suis	très heureux	de	*vous voir.*
I	am	very glad	to	*see you.*

2.

J'	ai	quelque chose	à	*vous dire.*
I	have	something	to	*tell you.*

3.

Il	paraissait	ne pas	*me voir.*
He	seemed	not to	*see me.*

4.

Pourquoi	avez-vous	*fait*	si longtemps	*pour vous préparer?*
Why	have you	*been*	so long	*in getting ready?*

5.

Je	*vous ai dit*	de venir	*chez*	moi	hier,	pourquoi
I	*told you*	to come	*to*	me	yesterday,	why

ne l'avez-vous pas fait?
did you not do so?

また，フランス語を学びはじめた者が最初につまずくのは動詞の変化の多様さに接した時であろう。そこで，動詞の変化は，綴字よりも音声で覚えるように指導したい。直説法現在の第一群規則動詞を例にとれば，

（フランス語）		（英　語）	
je parle	nous parlons	I speak	we speak
tu parles	vous parlez	you speak	you speak
il parle	ils parlent	he speaks	they speak

であり，これを綴字でみると英語は speak と speaks の２種類であるが，フランス語は５種類もある。しかしこれを音声でみれば，英語の２種類に対してフランス語は３種類で１つ多いに過ぎない。他の動詞の変化も音声での種類はそう多くない。なお，通常フランス語の動詞の学習の最初に扱う第一群規則動詞が動詞全体の90％ばかりを占めるということをあまり印象づけないほうがよい。なぜなら，日常生活に多く用いられる動詞に不規則動詞が多いからである。フランスにおける「基本語フランス語計画」(L' élaboration du français élémentaire) によれば，日常生活でもっとも頻度の高い動詞，およびもっとも有用な動詞のそれぞれ上位10語は次のとうりであって不規則動詞が多い。

（最も頻度の高いもの）	（最も有用なもの）
être	manger
avoir	boire
faire	dormir
dire	écrire
aller	lire
voir	marcher

savoir	aller
pouvoir	parler
falloir	travailler
vouloir	prendre

次に，フランス語を学ぶことによって英語をより深く理解することが出来るという点についてであるが，雑誌「現代英語教育」(1980年11月号）において，左々正治氏が紹介しておられる米国インディアナ州，パーデュー大学におけるフランス語初級の受講生260名に対して行なった「将来フランス語を使う可能性がもっとも高いと思うのは」の調査結果では，①フラスン語圏への旅行（頻度194)，②フランス文化の理解（141)，③母国語の理解（131)，④米国のフランス人との会話（121)，⑤仕事上の文通（93)，⑥研究用文献の読解（62)，⑦フランス語圏での仕事（48)，⑧留学（21)」となっている。ここで注目したいのは「母国語の理解」が3番目になっていることである。アメリカの大学生がフランス語を学習することは母国語の理解に役立つと高い比率でフランス語学習の有用性を認めていると判断することができる。もちろん，フランス語学習をアメリカ人が母国語の理解に役立つと考えることと，日本人の英語学習に役立つと考えるのと同次元で扱うことはできないが，その有意性としては同じものがあろう。例えば，松井恵美氏が著書「英作文における日本人的誤り」の中で「There is a hotel on the hill. と The hotel is on the hill. の2文を学生に示して，どう違うかたずねたが，はっきり答えられる者はいなかった。」として，存在文「場所＋不定な事物」，所在文「特定な事物＋場所」について書いてられるが，フランス語も同様，Il y a un hôtel sur la colline. L'hôtel est sur la colline. であって，Il y a のあとは，不特定名詞であり，特定の名詞なら L'hôtel est ... の形をとる。このことから，Il y a ... の構文の否定形は，Il n'y a pas de ... と否定冠詞の de がくることがわかる。逆に言えば，フランス語で Il y a の否定形が Il n'y a pas de の形をとるということが，英語の冠詞の性格を考えなおす契機を与えるであろう。ま

た，フランス語の動詞の多くは，英語では動詞句に相当するものが多い。例えば，

（仏）動詞	（英）動詞句	
Entrez.	Come in.	Go in.
Sortez.	Come out.	Go out.
Montez.	Come up.	Go up.
Descendez.	Come down.	Go down.

このことは，フラスン語を通して英語の動詞の性格を理解するのに役立つであろう。また，私の経験では，代名動詞の学習時に，Il arrête un moment. Il s'arrête son cheval. のような文例を通して，英語の自動詞と他動詞の相違にあらためて注意を向ける者が多くいる。

む　す　び

短期大学における一般教育科目としての第二外国語教育は，限られた短い時間の学習である。この現実を踏まえて，いかなる目標をかかげ，どのように効果をあげるべきなのか。このことは今後研究し続けていかなければならないことがらであるが，自分の経験を通して，その「在り方」と「方向づけ」をまとめてみたつもりである。本学は「英語科」の単科の短期大学であるので，私は特にフランス語の授業を英語学習と関連づけることを配慮してきたし，今後もさらにそれをすすめていきたいと考えている。ただ，フランス語と英語は友達のようにみえて実は「にせの友達」(faux amis) と言われるように，比較学習においては，両言語が似ているからといって学習者にとってすべてがプラスに働くとは限らないということを十分考慮に入れてすすめなければならないと思っている。しかし，英仏両語を比較して学ぶ効用は学生にとって極めて大きいと確信しているので，これを現実に即した形に多少とも自分なりに体系づけていきたいと考えている。

参 考 文 献

Grew, J. H. & Olivier, D. D., *1001 Pitfalls in French.* (New York: Barron's Educational Series, Inc., 1974)

Mansion, J. E., *A Grammar of Present-Day French.* (London: George G. Harrap & Co. Ltd., 1968)

Mauger, G., *Grammaire Pratique du Français d'Aujourd'hui* (Paris: Hachette, 1968)

Mauron, A., *Nouvelle Grammaire Anglaise* (Paris: J. Groos, 1889)

Resnick, S., *Essential French Grammar.* (New York: Dover Publication, Inc., 1965)

Di Pietro, Robert J., *Language Structures in Contrast.* 1971, 「言語の対照研究」小池生夫訳，大修館，1974

Halliday, M. A. K., McIntosh, A. & Strevens, P. D., *The Linguistic Sciences and Language Teaching.* 1964,「言語理論と言語教育」増山節夫注，大修館，1977

Mackey, W. F., *Language Teaching Analysis.* 1965,「言語教育分析」伊藤健三，和田正吾，池田重三共訳，大修館，1979

石坂忠之「基本フランス語文型（英語からみたフラスン語)」開拓社，1968

小泉清明「(英語で解説した）基本フランス語文法詳解」駿河台出版社，1974

松井恵美「英作文における日本人的誤り」大修館，1979

斉藤繁司「英語活用初歩フランス語」白水社，1978

「英語教育学研究ハンドブック」垣田直巳編，大修館，1979

雑誌「現代英語教育」研究社，1980，11月号

雑誌「基礎フランス語」三修社，1980，5月号